

黒人女性 Mollie の大義と夫 Lucas の自尊心

—Faulkner の *Go Down, Moses* と
Intruder in the Dust における両者の対比—

“Go Down, Mollie” :

Mollie Beauchamp in *Go Down, Moses*
and *Intruder in the Dust* by William Faulkner

Sachiko Suganuma
菅沼 幸子

要 旨

本稿では、William Faulkner (1897-1962) の *Go Down, Moses* (1942) と *Intruder in the Dust* (1948) において重要な役割を果たす、黒人夫妻 Lucas と Mollie Beauchamp を中心に分析する。黒人 Lucas の特異点は強い自尊意識を持っていることである。その自尊とは、先祖が古い家柄の白人であることと、その血統を男系で受け継いでいるということだが、それは Lucas が白人優位主義や父権的権威主義を内面化していることを意味する。このような Lucas には、白人を糾弾することは自分の自尊の原点を糾弾することとなり、ためらいがある。

一方、その妻 Mollie には、Lucas にはない、強靱な精神と、夫 Lucas の行動を神が許さぬ仕業だと考えるときには躊躇なく離婚をも決断する強い意志と柔軟性がある。彼女は、冤罪で処刑された孫の Butch の葬儀を通して奴隷制を告発し、また、南部紳士の温情主義を排して葬儀を新聞記事にすることで Butch の刑死を公にする。

夫 Lucas の硬直した特異性に対比して、強い精神力を持つ Mollie の、人間としての可能性について考察を深めてみたい。

キーワード：白人優位主義、父権性、Old Carothers の権威、Mollie の強さ

1. はじめに

William Faulkner (1897-1962) の *Go Down, Moses* (以降 *GDM* と略す) は 1940 年から 1941 年にかけて書かれ、1942 年に出版された。その 6 年後 *Intruder in the Dust* (以降 *ID* と略す) が 1948 年に発表されている。この両作品において、作者 Faulkner は黒人 Lucas (Lucius) Quintus Carothers Beauchamp に重要な役どころを与え、作者自身も所属するアメリカ南部社会における人種問題について光をあてている。

Faulkner の作品¹ には、例えばノーベル文学賞を受賞するきっかけとなった主要な作品、*The Sound and the Fury* (1929) の、過去の栄光を懐かしむのみで今となっては没落するしかない Compson 家のように、アメリカ南部の白人の心象を表現したものがあつた。それに対して、約 2 年かけて書かれ、7 編の独立した短編でもあり、Faulkner 言う (“I always thought it was a novel” (Cowley, 113)) ところの長編小説でもある *GDM* では、同じように家柄を誇っている McCaslin 家を創出している。ここでは、家系の始祖である Lucius Quintus Carothers McCaslin (Old Carothers) の白人の子孫、Isaac (Ike) McCaslin と、始祖の犯した恥ずべき罪業により生まれた黒人の子孫 Lucas (Lucius) Quintus Carothers Beauchamp を対比し、アメリカ南部に於ける現実社会の、よりリアルな人種問題に焦点を当てることに成功している。そして、引き続き *ID* では推理小説の形態をとり、Lucas はリンチに直面する黒人として再登場し、主に前半部分で重要な役割を演じている。*The Sound and the Fury* では、黒人女性 Dilsey Gibson が、白人登場人物と対比され、彼らがより際立つための脇役として存在した。しかし *GDM* や *ID* では、そのような脇役黒人像から転じて、Lucas を重要な役に設定し、そのキャラクターを前面に出している。田中久男も、「言わば『見えない』存在であった黒人が『見える』存在としての人間の顔を持ち始めるといふ改変」(259) と指摘しているように、このような黒人像の転換は、当時のアメリカ南部の社会的状況や、特に 1950 年代から Faulkner が公にしている人種問題に関する彼の意見を勘案すると、当然の帰結と言えよう。

さらに、*GDM* では、Lucas の妻、Mollie² (Molly) が Lucas と同等、あるいはそれ以上に重要な役どころに設定されている。第 2 章の “The Fire and the Hearth” でも Mollie は頻出するが、*Go Down, Moses* という小説の題名をそのまま章題とする、最終章 “Go Down, Moses” には Mollie が主役として登場し、Lucas は一切登場しない。後述するが、この章のテーマと Lucas の登場しないこと (実質的退場) の特異性を

同時に考察すると、ここに黒人女性 Mollie の役割の意義が見えてくる。

両作品の登場人物や語り手の、言動や行動に焦点を当ててみると、Faulkner が Lucas と Mollie というキャラクターを通して、Jefferson (Faulkner が創出した、小説の背景となる架空の町) に代表される南部社会での黒人たちをどのように表現しようと試みたかがほの見える。そこで、本稿では、黒人夫妻 Lucas と Mollie を中心として、彼等を取り巻く他の登場人物や諸事例を分析し、Lucas の到達点及びその限界、そして、Mollie の可能性について考察を深めてみたい。

その前に、二作品について付記しておきたい。*GDM* と *ID* は別々の独立した作品として発表されているが、本稿で両作品を継続したものとして考えることの是非については次のとおりと考えたい。Faulkner は 1957-58 年において行われた Virginia 大学における講義の中で、*ID* について、“one would be a man in jail about to be hung...he couldn't get anybody to help him. Then, the next thought was, the man for that would be a Negro. Then the character of Lucius—Lucas Beauchamp came along” (*Faulkner in the University*, 142) と、まず最初に Lucas のイメージが浮かんだことから始まった、と述べている。冒頭で述べたように、*ID* 出版の 6 年前に *GDM* は発表されているが、すでにその中の第 2 章 “The Fire and the Hearth” (以降 “FH” と略す) の中で、Lucas は主人公としてさまざまに描写されている。つまり、*ID* が発表されるまでに *GDM* において Lucas のイメージはすでに出来上がっており、*ID* では彼のイメージが発展的に使用されたと考えられる。妻 Mollie も当然両作品でそのイメージを引き継いでおり、この意味で彼等二人を論ずる際は、両作品を連続したものとして扱ってもよいと思われる。

2. Lucas の人物像

最初に、*GDM* と *ID* において黒人 Lucas がどのような人物として描かれているのか、確認しておく。まず、Lucas の出自について述べたい。彼は、Jefferson の旧家 McCaslin 家の創始者 Lucius Quintus Carothers McCaslin (Old Carothers) を先祖としているが、McCaslin ではなく彼の母方の姓 Beauchamp を名乗っている。Old Carothers は奴隷女 Eunice に娘 Tomasina (Tomy) を生まれさせ、さらに Tomasina に対し近親相姦を犯した。その結果生まれた男子 Terrel が Tennie Beauchamp と結婚し、生まれた子供の一人が Lucas である。そのため Lucas にとって Old Carothers は曾祖父でもあり

祖父でもある。

Faulkner は意図的に Lucas を他の一般的な黒人達とかけ離れた特異な人物として描こうとしている。どのように特異なのかは Lucas の出自からくる人間性に負うところが大きい、それについては後述するとして、まずは Lucas の置かれている社会的及び経済的状況について述べる。

Lucas は、特異な部分を除くと、当時の一般的な黒人像に沿って描かれている。Lucas は Zachary (Zack) Edmonds から、McCaslin 農場の中に 10 エーカーの土地と家をもらい家族と暮らしている (*ID*, 289)。そのもらった土地と家は、“the house and the ten acres of land it sat in—in the middle of the two thousand acre plantation like a postage stamp in the center of an envelope—” (*ID*, 289) とあるように、Edmonds の二千エーカーもの広大な農園の中に、封筒の中心に貼られた郵便切手のように、ぽつんと鎮座しているのだ。McCaslin 農場は、正当な後継者、Ike が先祖の罪を恐れて農園を継承する権利を放棄したため、Old Carothers の娘の家系、つまり女系の血を引き、その娘の婚家先の姓 Edmonds を名乗る、McCaslin (Cass) Edmonds が農園を継承し、Cass, Zack と時代を経て Carothers (Roth) Edmonds が現在の当主となっている。

ただし、両作品を通して Lucas に土地所有権の所在があるのかは一貫していない。Lucas 自身が “he had decided to quit farming, was old enough to retire, and for Edmonds to a lot allot his land to someone else to finish the crop” (“FH”, 33) と、借地であることを示唆している表現もある。また、Lucas は農園のベルが鳴るのに合わせて働いたり、休んだりと自分の労働時間を管理しているし (“FH”, 45)、農園主の Roth が “I would like to see your south creek piece planted by tomorrow night” (“FH”, 47) と耕作について命令している様子からは、彼はほんの 10 エーカーの土地を耕すシェアロッパーであると推測される。Daniel J. Singal も “From the perspective of 1941, it still appeared that the overwhelming majority of blacks would be locked indefinitely into sharecropping” (269) と、ほとんどの黒人がシェアロッパーの状態にあったと指摘しており、Lucas も時代的にその状況に相応する。本多創造によると、南北戦争後、奴隷解放された黒人たちの切実な要求は、「四十エーカーの土地と一頭のラバ！」(133) だったので、Lucas の 10 エーカーの耕作地面積は当時の解放奴隷黒人たちの要求水準以下であり、しかも、“[Lucas] stabled and fed Edmonds’ mule” (“FH”, 37) とあるように、Lucas はラバも持っていなかった。

また、*ID* の冒頭、Roth Edmonds にウサギ狩りに招かれた語り手の少年 Charles (Chick) Mallison Junior が途中で川に落ちた時、Lucas は Chick を自分の家に招き入れている。その時 Chick は、Lucas の妻 Mollie の、頭に布を巻いていない写真を見ている。それについて、Lucas は “I didn’t want no field nigger picture in the house” (*ID*, 294) と説明をしている。上杉忍によると、「解放された黒人男性も自分の妻を家事と育児に専念させたいと望んだ」(128) とあり、このエピソードからは Lucas もまさに一般的黒人男性の願望、つまり白人家庭の性別役割分業への憧れに沿って描かれていることがわかる。

しかし、Lucas は、ある一点において一般的な黒人達にはない特別な感性を持っている。Lucas 自身の血脈に対する誇り高き意識である。ある日、Lucas は、ある工員らしき白人から “...Edmonds sonofabitch” (*ID*, 297) とひどい言葉を浴びせられた時に、“I aint a Edmonds. I dont belong to these new folks. I belongs to the old lot. I’m a McCaslin” (*ID*, 297) と言い返し、自分が Edmonds より古い家系である McCaslin に属していることを強調し、その古い血筋の一員であることを誇示する。

このように誇り高い Lucas は Chick を招いた時、特別なもてなしをする。Lucas は、白人 Chick がたとえ子供といえども Roth Edmonds の個人的な客ではなく、McCaslin 農場の公的な客として対等に遇している。その矜持ゆえに Lucas は Chick から謝礼として渡された金を断固として受け取らない。

白人少年 Chick は、無意識ではあるが、黒人に対する優越意識を持っている。Lucas の家に入った時、Chick はある特別な臭いを感じる。それは無意識のうちに刷り込まれた観念的な認識としての黒人の匂いであった。“he could smell that smell which he had accepted without question all his life as being the smell always of the place where people with any trace of Negro blood live...” (*ID*, 290)。実際は、“a bedroom : a bare worn quite clean paintless rugless floor” (*ID*, 290) とあるように、Lucas の家の床は清潔だし、Mollie が頭に巻いているきれいに洗濯された布からわかるように、きちんとした暮らしぶりである。Chick もそれを事実として認識しているにもかかわらず、Chick は黒人の匂いを感じとる。

the smell were really not the odor of a race not even actually of poverty but perhaps of a condition : an idea : a belief : an acceptance, a passive acceptance by them them-

selves of the idea that being Negroes they were not supposed to have facilities to wash property or often or even to wash bathe often even without the facilities to do it with ; that in fact it was a little to be preferred that they did not (ID, 291).

たとえ 12 歳の少年であっても、彼を取り巻く白人の上流階級社会から刷り込まれた、「黒人とはこうあるはずだ」と定義された固定観念を既に内面化しており、それに基づいて、Chick は黒人 Lucas を対等と認めるわけにいかない。この場では Chick は素直にもてなしを受けるわけにいかず、彼の白人としての優越感の無意識の表出として、ポケットにあった小銭を Lucas に差し出す。だが、Lucas は Chick の優越感を拒否する。そればかりでなく、後日 Chick が精一杯の礼として贈ったさまざまな品物に対して、Lucas は必ずそれ以上の返礼をした。最後に Mollie にドレスを贈った時には、“A white boy brought it on a mule” (ID, 300) と白人の子供を使って返礼を届けさせ、子供に対しても容赦がない。Lucas はどこまでも自負心を貫き通すのである。

町の人はこのような Lucas を不愉快に思っている。Lucas が自分が黒人であるという劣性を受け入れるなら、自分たちも彼を受け入れようと考えているのである (ID, 296)。そして、黒人社会からも “It’s the ones like Lucas makes trouble for everybody” (ID, 347) と、やはりよく思われていないことが、Chick の幼馴染の黒人 Aleck Sander の発言からわかる。ただし、世間からどう思われようと、誇りを貫くのが Lucas の Lucas たる所以である。それから 4 年後、Chick は Lucas が家族も友もなく、むしろそれを誇りとして独り住まいしていることを知る (ID, 304)。

3. Lucas のまとう Old Carothers の権威

Lucas の権威主義的な虚勢を端的に表すのが、彼が町へ出向く時の服装である。以下は Chick が街で見かけた Lucas についての描写である。

He [Chick] had seen him [Lucas] three times more, on the square in town and not always on Saturday...when all the Negroes and most of the whites too from the country came in...but on weekdays like the white men who were not farmers but planters, who wore neckties and vests like the merchants and doctors and lawyers themselves, as if

he refused, declined to accept even that little of the pattern not only Negro but of country Negro behavior, and always in the worn brushed obviously once-expensive black broadcloth suit of the portrait-photograph on the gold easel and the racked fine hat and the boiled white shirt of his own grandfather's time and the tieless collar and the heavy watch-chain and the gold toothpick like the one his own grandfather had carried in his upper vest pocket. (*ID*, 301)

Lucas は、田舎からくるほとんどの黒人や白人のように週末にはではなく、まるで農園主や商人や医者や弁護士のように週日に町へ来る。その時には、彼のお祖父さん Old Carothers の時代の物のような、古いがかつては立派だった服装で来る。この服装は、まるで制服であるかのように、土曜日や日曜日、町へ来る日など、彼にとって特別な日には必ずと言っていいほど着用される。ピストルの携行もしかりである。殺人事件に巻き込まれた Lucas に対して、Chick の叔父である弁護士の Gavin Stevens が “But why the pistol?” (*ID*, 454) と聞いた時の Lucas の答えが、“It was Sat-day” であった。Gavin は “You [Lucas] wear the pistol when you dress up on Saturday just like old Carothers did” (*ID*, 454) と、Lucas の行動について納得している。彼は常に Old Carothers の行動を権威の象徴として、踏襲しているのである。

Lucas は、“He, Lucas Beauchamp, the oldest living McCaslin descendant still living on the hereditary land, who actually remembered old Buck and Buddy in the living flesh, older than Zack Edmonds even if Zack were still alive, almost as old as old Isaac” (“FH”, 31) とあるように、初代 Old Carothers の息子たちの生前を知り、孫の Isaac とほとんど同年で、さらに現在の当主 Roth Edmonds の父 Zack より年上であり、McCaslin 農場での最年長を誇っている。現当主 Roth も、Lucas は、自分より若く見えるが、Old Carothers の顔の生き写しという程度ではなく、完全なその世代の因習と考え方を引き継いでいる者と認めざるを得ない。Lucas の背後には常に Old Carothers の権威がオーラのようにかぶさり、Edmonds を心理的に圧迫している。Lucas は、黒人に分類されるとはいえ、McCaslin の血を曾祖母と祖母と二代にわたって受け、しかも強力な Old Carothers の権威をも引き継ぎ、さらに、年齢を経ることによって、Roth のような若い層には消滅した Old Carothers 時代の古い生活様式や思考方法を体現する年長者として、McCaslin 農場に存在する。白人社会が持つ、白人優位、父権優位の価

値観に黒人 Lucas も同化し、その価値観を拠り所に Lucas は君臨する。“*Lucas is impervious to anybody, even to forgiving them, even to having to harm them*” (“FH”, 89) と Roth が考えるように、Lucas は、あらゆる事柄、あらゆる人物に一切影響されずに孤高を貫く。

もちろん、Lucas にも黒人としての劣等意識から生じる、白人に対する行動への躊躇はある。Zack の妻が Roth の出産で死亡したあと、Lucas の妻 Mollie は、その少し前に生まれていた Lucas と Mollie の息子 Henry を連れて Edmonds 家にとどめ置かれた。Singal が、“...had been Zack’s decision to import Molly into his [Zack’s] house as a wet nurse after his wife had died giving birth to Roth, a common enough practice in the South at that time. Lucas was at first willing to tolerate the arrangement...” (271) と言っているように、その当時もまだ黒人女性が乳母として主人の家に入ることは一般的なことであったようだ。そのため、Lucas はしばしの間はそれを受け入れ、我慢したが、そういう場合によくあることとして、Lucas は Zack が Mollie を性的に所有したと思っている。Lucas も、曾祖母と祖母に祖父の Old Carothers が行使した性的暴力は当然知っていると考えられ、この事件の記憶を喚起すると、Mollie にも同じことが起こり得ると考えただろう。

Watching the plantation owner summon Molly [Mollie] to the big house triggers powerful and conflicting memories of the series of sexual encounters involving Old Carothers and his female slaves that had produced Lucas’s father. On the one hand, Lucas remains loyal to Old Carothers, his flesh-and-blood ancestor who has bequeathed him an invaluable psychological legacy. On the other hand, he knows that he is descendent from black women who were shamelessly violated by their white master. (Singal, 271)

上記のように Singal が指摘しているが、Lucas は、白人農場主 Old Carothers が起こした黒人女性への性的搾取が、再び妻 Mollie にも起こり得ると危惧しているが、同時に白人の主人への忠誠心も堅持している。妻のことを思うなら、早急に救いに行くべきであるが、“I wants my wife. I need her at home” (“FH”, 36) と Lucas が要求しているのは、半年もたってからであった。後日、Lucas は次のように述懐している。

“How to God...can a black man ask a white man to please not lay down with his black wife? And even he could ask it, how to God can the white man promise he wont?” (“FH”, 46) と。Lucas は、白人に対して、言いようのない劣等意識を吐露している。

Zack と Lucas は共に Lucas の母親の乳で育った乳兄弟である (“FH”, 36)。互いに信頼しあっていたはずだが、それでも Lucas は Zack には白人の優位性があると考えている。黒人 Mollie は黒人 Lucas の妻であり、もし Zack が Lucas を劣等視していれば、Mollie を躊躇なく性的に所有するはずと Lucas は考えたに違いない。心理的に優位に立とうとしたのか、Zack との決闘の前に Lucas の発した言葉、“I’m [Lucas] a nigger,” ... “But I’m a man too. I’m more than just a man. The same thing made my pappy that made your grandmaw” (“FH”, 37) にみられるように、自分は黒人だが、と前置きをしつつ、自分と Zack は同じ血筋だが、自分は父系で Zack は母系だ、と自分の血筋の優位性を強調している。Mollie の占有について、白人の優位性を内面化してしまっている Lucas は、Zack に対して、自身の優越性を誇示するには男系の血筋を強調することしか術がない。

また、Lucas は、Roth の父 Zack や Roth 自身を呼ぶときの敬称の付け方のことで、Roth に煩悶を起こさせている。なぜ Lucas は、他の黒人たちのように、Mr. Zack もしくは Mr. Roth と、名前に Mr. を付けて呼ばないのか、なぜ必要な時のみ、しぶしぶ Mr. Edmonds と苗字に Mr. を付けて呼ぶことですかと、子供時代の Roth はずっと疑問を抱き続けていた (“FH”, 81)。Roth にとって黒人から Mr. Roth と呼ばれないことは重大な問題であり、不愉快なことであった。Mr. という敬称の持つ意味を考えると、黒人 Lucas から Mr. Roth と呼ばれないことは、Lucas が Roth を尊敬していないと公言していることに等しい。それは、ひいては白人社会での自分の立ち位置を危うくすることでもあった。Philip M Weinstein は、次のように Mr. の持つ意味合いについて述べている。

Descended from master, mister performs as an address of respect” ...To be addressed as Mr. is to be addressed properly, with propriety, with the implication of property. All three of notions —property, propriety, the proper— are legacies reserved (well into our century) for white only. Together they constitute the mastery that stands behind *mister*, and they point to those aspects of (white) manhood denied explicitly to the

black male slave and implicitly to the black freedman. (88-89)

Roth がまだ子供だった頃に、父 Zack から受けた次の説明、“Lucas is older than I [Zack] am, old enough even to remember Uncle Buck and Buddy a little, and is a descendant of the people who lived on this place where we Edmonds are usurpers, yesterday’s mushrooms, is not reason enough for him not to want to say mister to me?” (“FH”, 88) という事実だけでは彼は納得しきれなかった。本当は Mollie をめぐる争いが Zack と Lucas の関係に影を落とし、結果は Lucas が勝利したのであった。“*And by God Lucas beat him , , , Edmonds*” (“FH”, 89) と、Edmonds は Lucas を凌駕できないことを Roth は今にして痛感する。

Lucas の強烈な自尊心は、家系の始祖、Old Carothers の血を、父親を通じて受け継いでいる、ということに尽きるようだ。しかし、Lucas のような存在は、南部では、いわばありふれていると言える。奴隷制時代のアメリカ南部においては、白人男性主人による黒人女性奴隷への性的な暴力や搾取はまれではなかった。その結果生まれた混血の子供は当然男系で奴隷所有者の家系の血を引いている。それでも、彼には特異な精神構造がある。彼自身が黒人であるにもかかわらず、白人の価値観である南部の古いヒエラルキー、つまり白人、男性、門地の優位性を受容し、それを自分のものとして同化しているのである。さらに、彼はいまだに McCaslin への忠誠心を内面に維持しているのだ。

このような男系優位の思想は当然白人 Roth のものでもある。Roth は次のように自虐的に考えている。

Now the white man [Roth] leaned in the window, looking at the impenetrable face [Lucas] with its definite strain of white blood, the same blood which ran in his own veins, which had not only come to the negro through male descent while it had come to him from a woman, but had reached the negro a generation sooner—a face composed, inscrutable, even a little haughty, shaped even in expression in the pattern of his great-grandfather McCaslin’s face. (“FH”, 54)

Roth は Lucas と自分の血筋の優劣を思い、自分の劣性を認める。たとえ Lucas は黒

人でも、Old Carothers の血統を父方から継承しているため、母方から継承した Edmonds より上位にある、ということの意味を嘸みしめている。つまり男系が尊ばれる社会の価値観の中で、白人の Roth は黒人の Lucas を内心では上位と認めざるを得ないのである。

4. Lucas の家庭生活

次に Lucas の家庭生活に目を向けてみよう。Lucas は妻 Mollie との生活の中で、やはり権力をふるっている。Mollie は Zack に止め置かれたことは前述した。Mollie が留守の間、Lucas は独居だが、自分たちが結婚した時に灯した暖炉の火を今も自分が守っている、と彼は思っている。

he now living alone in the house which old Cass had built for them when they married, keeping alive on the hearth the fire he had lit there on their wedding day and which had burned ever since though there was little enough cooking done on it now (“FH”, 36)

実際は妻 Mollie が、Lucas のための食事の用意などで、その火を絶やさない努力を続けてきた。Mollie は、当然のように Edmonds の家事や育児をしながらも、夫 Lucas のために Beauchamp 家の家事もこなしていた。その火は単に Lucas の家長としての権威付けのためにあるわけではない。夫婦二人のための記念碑でもあり、生活の道具でもあり、まさに彼らの家族の歴史を象徴するものだ。しかし、多忙な Mollie が畑まで Lucas の昼食を届けても、“[Lucas] did not look at her” (“FH”, 45) とあるように、夫 Lucas は妻 Mollie を見もしない。

さらに、Lucas が密造酒を製造販売していた時までは黙認していた Mollie も、彼が埋蔵金探しに夢中になった時、その仕業は神が許すことではないと、決死の覚悟でインチキな埋蔵金探知機を家から持ち出し、そして Lucas に離婚を請求する。しかし、Mollie が離婚請求していると Roth に告げられた時の Lucas の反応は、“All right” ... “What’s it [divorce] going to cost me?” (“FH”, 92) と平静を装い、離婚問題を金の問題に矮小化させる。そして、“I’m [Lucas] a man.” ... “I’m the man here. I’m the one to say in my house . . .” (“FH”, 91) と、Roth に向かって、自分が家長で

あることを誇示する。結局、離婚が成立しそうになった直前に、Lucas が調停裁判に割って入り、離婚請求は取り下げられる。調停裁判所から帰る時、“He was carrying a small sack—obviously candy, a nickel’s worth. He put it into Molly’s hand. ‘Here,’ he said. ‘You aint got no teeth left but you can still gum it’” (“FH”, 100) と、Lucas は Mollie にわずかなアメを買い与える。Lucas にとって、妻の離婚の決意はアメの値打ちぐらいの日常茶飯事でしかなかったのか、はたまた男の沽券として妻に謝罪をすることはできず、代償行為として餉の購入に至ったのか、それは定かではない。ともあれ、67 歳になるまでの Mollie との結婚生活の歴史は、アメ一袋にすり替わってしまう。このように Lucas は、自分だけが家庭での采配者であると考え、妻の意見や思いを無視し、その価値を認めない。まさに Lucas は父権的で男性優位主義者と言えよう。

5. Mollie の存在意義

GDM の最終章、“Go Down, Moses” には、Lucas が登場しない。この章は、その章題が示すように、神の啓示が Moses に降り、エジプトの奴隷制からの解放という、宗教的なイメージが付与されている。物語は彼の孫の Samuel (Butch) Worsham Beauchamp が殺人の冤罪を着せられて死刑になる直前から始まる。彼は刑が執行される前に、正確な自分の出自と、両親のことは知らないが、祖母の Mollie Worsham Beauchamp が自分を育ててくれたと国勢調査官に答えている。そして、“No. It was another guy killed the cop.” (“Go Down, Moses”, 270) と自分が無実であるとも言っているが、これは無視される。Butch が処刑されることを、何の情報も手に入れていないはずの Mollie が、神がかったのか、なぜか悟って、彼の遺体を引き取って、町中に宣伝するような盛大な葬儀を行い、そして埋葬したいと望んでいる。遺体が町に戻され、埋葬する前に、Mollie は彼女の乳兄弟 Miss. Eunice Habersham のところで、Mollie の兄夫婦や Miss. Habersham とともに哀悼している。その間中、皆で不思議な文句をお経のように唱えている。

“Sold my Benjamin...” ...

“Sold him in Egypt and now he dead.” ...

“Oh yes, Lord. Sold him in Egypt.” ...

“Sold him to pharaoh.” (“Go Down, Moses”, 278-279)

歌のリフレインのような、同じ文の繰り返しではあるが、冤罪の Butch の弁明を聞くまでもなく早々と彼を処刑した白人たちに対する激しい怒りと、言いようのない悲嘆を込めた呪文である。Mollie は、この呪文によって旧約聖書の『出エジプト記』の Moses の故事を喚起させ、比喩的にアメリカの奴隷制はまだ終わっていないと告発している。弔問に訪れた Gavin Stevens でさえ、“I ask you [Miss. Habersham] to forgive me. I should have known. I shouldn't have come” (“Go Down Moses”, 279) と戸口まで送った Miss. Habersham に言っ、白人である自分が儀礼的な弔問に訪れたことを謝罪している。このリフレインには、当事者の黒人達にしか理解できない、深い哀悼と激しい告発が込められている。Mollie は、“It was Roth Edmonds sold him [Butch] ...Sold him in Egypt” (“Go Down, Moses”, 271-272) とはっきりと Roth を名指しで糾弾している。南部で何度も事件を起こした、荒れた黒人青年 Butch の面倒を見続けることを放棄し、McCasin 農園から、引いては南部から追放した直接の当事者 Roth と、北部へ逃げざるを得ないような状態を強いた Roth に代表される上流白人たちの責任を問うているのである。これについて、Erik Dussere は次のように述べ、『出エジプト記』のユダヤ人の奴隷の歴史が Butch の処刑と黒人の歴史に重ねられていることを指摘している。

she [Mollie] evokes the slave spiritual of the title, ‘Go Down, Moses’ (“Go down Moses, way down in Egypt’s land/Tell old Pharaoh to let my people go”). Through the metaphorical vehicle of the spiritual, Mollie links the fate of her grandson, dying in a prison in the urban North, to a history rooted in slavery, a family legacy. Faced with the assertion that slavery has not stopped producing misery (53).

さらに、Singal は “perhaps Roth is guilty after all in his role as conservator of a system that had oppressed young blacks for generations, causing more and more of them to flee to the ‘Egypt’ of the North... (274) と述べて、Egypt を American North の象徴と定義し、保守的な Roth にもその責任の一端はあるだろうと指摘している。Mollie は通常は自分自身の内面や希望をめったに語らない。その Mollie が、奴隷制と、その名残である黒人たちの、今も続く劣悪な状態について告発をする。

では、なぜ Mollie はそこまで盛大な葬儀にこだわったのか。Singal は、“Since she

[Mollie] as a black woman views burial as a sacred rite” (272) と述べて、黒人 Mollie は葬儀を神聖な儀式とみなしていると解き明かしている。Mollie が信心深いことは、上述したとおり、経文のようなりフレインを唱え続けていることからわかる。Mollie にとっては Butch の葬儀を盛大に行うことは彼女の主張の明示であった。盛大な葬儀は、結果として、町の人々に Butch の最期を公に知らせることとなり、なぜ彼が死なねばならなかったのか、彼等にその原因について想起させる一つ的手段となり得る。

そして、最後に Mollie は “Is you gonter put hit in de paper?...I wants hit all in de paper. All of hit” (“Go Down, Moses”, 280) と言って、葬儀で世話になった町の新聞社の編集長 Mr. Wilmoth にこの件についてすべてを記事にしてもらいたいと頼む。Gavin と編集長との間では、南部の紳士の温情から、この件については一切記事にしないと決着済みであったが、そうした温情は Mollie には必要なかった。彼女には、このような事件について、前向きな解決に取り組むべき能力はない。しかし、ただ、ありのままに、世間に知らしめたいという Mollie の意志は、社会の不平等な現状への意識を覚醒させることにいくばくかの影響力を発揮することだろう。

この重要な局面において、Lucas は登場しない。彼には孫の死を悼み、さらに社会悪を告発する感情がないのか。Lucas は Mollie のように、黒人のやり方での悲しみを表現することができない。Old Carothers の男系の血筋を自負している Lucas は、女系ではあるが、同じように Old Carothers の血筋である Roth Edmonds を、Mollie がしたように、責めることはできない。Roth を責めることは、奴隷所有者であった Old Carothers をもまた責めることになり、Old Carothers の権威をまとう Lucas にとって、自己矛盾をきたすことになるからだ。また、Lucas は、白人の Old Carothers の血を濃く継いでいることの優越感、つまり、白人優位の価値観に深く同化しているため、Mollie たちのような黒人の悲しみを真正面から共有することができない。

また、Lucas は、他人に関心がなく、人を思いやる心が欠如している。「2. Lucas の人物像」の項でも述べたが、自身の存在の元となった、奴隷の曾祖母 Eunice は白人の主人 Old Carothers に子供 Tomy を産まされ、Tomy もまた父である Old Carothers の近親相姦によって子供 Terrel を産まされている。曾祖母はそれを苦にしたのか、入水自殺をしたことが McCaslin 農場の台帳の中で明らかにされている (“The Bear”, 197)。その子 Terrel がたまたま男子であって、Lucas の父となる。父娘近親相姦の結

果として、Old Carothers の血を直接引いたこととなるため、これが Carothers の直系の男系の子孫であるという Lucas の自尊心の源となっている。しかし、この過去の近親相姦事件に伴う曾祖母と祖母の深い罪悪感と苦しみに Lucas は思いを致したことがあるのだろうか。先にも「3. Lucas のまとう Old Carothers の権威」のところで“*Lucas is impervious to anybody, even to forgiving them, even to having to harm them*” (“FH”, 89) と Roth が考えていると述べたが、このように、Lucas は全ての事に心を閉ざし、古い家柄の白人 McCaslin の男系の子孫であることに優越感を感じ生きてきた。Lucas の母方の先祖についての言及は皆無であることから、彼に母方の先祖について関心が無かった、もしくはその事実を黙殺していたことがわかる。

さらに、Butch は最期の時に彼の祖母 Mollie の名前しか口に出さなかった。このことから、Butch の養育においても Lucas がほとんど関らなかつたであろうことが推察できる。自分自身が奴隷制の悲惨さを引き継いでいるにもかかわらず、黒人系の血のつながりに対して無関心な Lucas は、奴隷制の残した社会悪から生じた Butch の死と、それに対する Mollie の慟哭に共感することが出来ないのである。

翻って Mollie を見れば、この章において、Mollie は McCaslin 農場を出て、Miss Habersham のところで従僕をしている兄の Hamp Worsham のところに身を寄せている。離婚は叶わなかつたが、いつの間にか Lucas との生活に決別したようだ。Mollie は、“a little old negro woman [Mollie] with a shrunken, incredibly old face beneath a white headcloth” (“Go Down, Moses”, 271) とあるように、小柄で、見るからに非力な老婆である。しかし、真っ白な頭の布が凜とした彼女の精神を象徴しているかのように、彼女は黒人としての、女性としての、自己の精神を確立している。言わねばならぬことを敢然として訴える強靱な Mollie がここにいる。

6. Mollie の可能性 —結びに変えて—

Lucas という人物像は、Faulkner が公言する、人種間平等を獲得できるはずの理想の黒人として創造されているという見解がある。例えば、Dussere は“Lucas is not a radical figure; rather, he is a version of the perfect Negro Faulkner invokes in his public writing, the one who is required to be *superior* to white people in order to be deserving of equality” (54) と述べている。では、Lucas は、果たして Faulkner にとって、「白人と同権を得るに値する完璧な黒人」なのだろうか。まず、Faulkner の人種間平等に対

する考え方について、彼が公表している資料を少し紐解いてみたい。

Faulkner は、“Address to the Raven, Jefferson, and ODK Societies of the University of Virginia”において、“Perhaps the Negro is not yet capable of more than second class citizenship” (*Essays Speeches and Public Letters*, 155-156) と規定したうえで、さらに、平等と自由の権利を獲得するためには、“he must first be worthy of it, and then forever afterward work to hold and keep and defend it. He must learn to cease forever more thinking like a Negro and acting like a Negro” (157) とし、その上、そのために黒人たちが学ばねばならない内容を、“self-restraint, honesty, dependability, purity; to act not even as well as just any white man, but to act as well as the best of white men” としている。さらに、南部人のみがこれらのことを黒人に教えることが出来る (157-158) と述べている。平等や自由は普遍的に人間に本来備わっているものであり、黒人に対して、それらを獲得するために、ことさらに条件を付けることはどうかと 21 世紀の我々は考えるが、とにかく Faulkner はそう語っている。

Faulkner はまた、Virginia 大学で講義した時にさまざまな質問に答える形で彼の考えを述べている。

the white man can never really know the Negro, because the white man has forced the Negro to be always a Negro rather than another human being in their dealings, and therefore the Negro cannot afford, does not dare, to be open with the white man and let the white man know what he, the Negro, thinks. But I do know that we in the South, having grown up with and lived among Negroes for generations, are capable in individual cases of liking and trusting individual Negroes. (*Faulkner in the University*, 211)

共に育ってきた南部人であれば、個人的な関係においては黒人と白人は友好関係を結ぶことが出来るが、そうでない時には、常に黒人には黒人として振舞うように白人が強制してきたので、黒人の方も真意を打ち明けず、白人は黒人の事を真に理解することはできないと言っている。

このような、Faulkner の考え方と照合してみれば、Faulkner が創造した Lucas という黒人像がさらに明らかになる。Lucas という人物の社会的位置付けについては、ス

テレオタイプな一般的黒人男性像を借用し、典型的なシェアクロッパーとして描くにとどめている。しかし、Lucas の特異点、つまり、先祖が白人で、その血筋が男系であることへの強烈な自意識と、誰に対しても不羈の姿勢を貫くという点に注目すれば、南部の誇り高き価値観と一致し、Faulkner の考えるところの、理想的黒人像であると言える。ただし、他人のことを思いやり、共感し、優しさを表現する能力が欠如している Lucas は、他人には無関心で、地域社会の中で孤立を余儀なくされている。他の黒人たちとは異なる稀な特異性を発揮し、Roth のように、白人さえもその特異性を認めざるを得ないという Lucas という男は、果たして Faulkner の言う「最良の白人以上の人物」、つまり “self-restraint, honesty, dependability, purity ; to act not even as well as just any white man, but to act as well as the best of white men” (“Address to the Raven, Jefferson, and ODK Societies of the University of Virginia”, 157) に相応する「理想の黒人」と言えるのだろうか。

むしろ、Lucas の妻 Mollie を見直してみたい。Mollie は、*ID* では、川に落ちた少年 Chick の世話を黙々と果たす以外の役割を与えられず、まもなく死亡したことが伝えられる。しかし、*GDM* の第 2 章 “The Fire and the Hearth” では重要な役割を与えられ、最終章 “Go Down, Moses” では主役を与えられている。

彼女は、どんな状況においても黙々と果たすべきことを行う。自分の息子 Henry も白人の子 Roth も、ともに誰の手も借りず一人で育てた。

[Mollie] fed him from her own breast as she was actually doing her own child, who had surrounded him always with care for his physical body and for his spirit too, teaching him his manners, behavior—to be gentle with his inferiors, honorable with his equals, generous to the weak and considerate of the aged, courteous, truthful and brave to all—who had given him, the motherless, without stint or expectation of reward that constant and abiding devotion and love which existed nowhere else in this world for him.... (“FH”, 90-91)

上記は Mollie が行った Roth の養育方法である。Roth も、母のような Mollie の愛情と、乳母として自分を完璧に育ててくれたことに感謝している。そのため Roth は大人になった今でも Mollie のことを大切にしている。もっとも、Mollie は、元主人の

白人から当然のように求められる役割をこなしたにすぎないかもしれない。主人の子供が成人後に温情ある南部紳士となれるよう、献身的に養育する、理想の乳母として彼女は設定されている。それは Faulkner が考える理想の乳母でもあった。結局 Edmonds の家で Roth の養育もこなしながら、Beauchamp 家を象徴する暖炉の火も、守ってきたのは彼女の叡智である。

日ごろは夫 Lucas に異を唱えることはないが、埋蔵金探しのように、その仕業は神が許さないことだと考えた時には、Mollie は身命を賭して埋蔵金探索機を家から持ち出し、それを制止する。この倫理観の高さは宗教的ではあるが、夫の Lucas には倫理と呼べるような哲学的思考はない。さらに、彼女には、そのような夫と今後結婚生活を続けることはできないと、決然と離婚を申し立てる決断力がある。埋蔵金を見つけ出すことは神が許さぬことである故、“I got to be free of him” (“FH”, 79) と、彼から自由になりたいと望むのである。もはや、“moving slowly and painfully, as the very old move” (“FH”, 77) と描写されるように、かなりの老齢に見えるが、“I can work. I will—” (“FH”, 78) と自分で自分の生活の面倒を見る意思は固く、強い気概を持っている。

また、Mollie は、孫の Butch の葬儀に際しては、挑発的な呪文を唱えることで、奴隷制への告発を行っている。Mollie には、論理的に正確に説明する場面と能力は与えられていないが、この重要な局面において、その意思を行動で示すのである。父権制社会において、祖父の Lucas ではなく、祖母の Mollie が葬儀を主宰し、“Sold him in Egypt and now he dead.” ... (“Go Down, Moses”, 278-279) と呪い、主人筋であり、彼女にとっては自分の乳で養育した可愛いはずの Roth に対しても、敢然と糾弾できる強い精神がある。そして、Gavin など南部紳士たちの思い込みによる温情主義を排し、Butch の死を公にして、社会の覚醒を促す。

Virginia 大学における講義において、“throughout your work there seems to be a theme that there’s a curse upon the South...what this curse is...” と質問があったのに対して、Faulkner は“The curse is slavery...” (*Faulkner in the University*, 79) と明確に答えている。“Go Down, Moses” はまさにこの奴隷制を告発する章であると言ってよいだろう。その章に Lucas ではなく Mollie が主役として配られているのである。Lucas のような、白人の価値観を内面化し、白人の先祖 Old Carothers の威を借るタイプの男性はこの章の主役とはなり得ない。Faulkner は “It’s much more fun to try to write

about women...I know very little about them” (*Faulkner in the University*, 45) と、女性のキャラクターを創造することは楽しいが、自分には女性のことはよくわからないと正直に答えている。当時の南部紳士としての Faulkner のジェンダー観では、彼が Lucas に期待したかもしれないような理想の黒人像を、女性の Mollie に実現させることは叶わなかったかもしれない。むしろ Mollie は、黒人と女性という二重差別の中にあっては、白人優位主義と、さらには家庭内では父権的な夫とも闘う必要があった。その中で、彼女は自分の人生を自分で決断する強靱さと、必要な時にはその変化を受け入れるしなやかさを見せている。

人間は、Faulkner の言うところの、“he must be worthy of it” (“Address to the Raven, Jefferson, and ODK Societies of the University of Virginia”, 157) のような、自由平等に値するかどうかという評価で押し量られるものではない。Mollie のように考え方が柔軟で、“南部の呪い”である奴隷制を告発できる勇気ある人物が、もっと普遍的な、もっと根源的な、人間としての可能性を秘めていると言えよう。

注

- 1 Faulkner は詩や短編等も執筆しているが、それらを除き主な長編小説に焦点を当てれば、約 36 年間に及ぶ作家としてのキャリアは、*Soldiers Pay* (1926) 出版に始まり *The Reivers* (1962, 没年) 出版に終わる。*Go Down, Moses* (1942) までの 16 年間に、概ね毎年 1 冊の割で 13 冊の小説を出版した。*The Sound and the Fury* (1929) は初期の 4 作目である。*Intruder in the Dust* (1948) から始まる残り約 20 年では、*The Mansion* など 7 冊の小説を出版している。
- 2 Lucas の妻 ‘Molly’ は、*GDM* の最終章 “Go Down, Moses” においてのみ ‘Mollie’ と表記され、*ID* と *GDM* のその他の章では ‘Molly’ と表記されている。本稿では、“Go Down, Moses” における ‘Mollie’ について言及することが多いため、引用部分を除いて ‘Mollie’ と表記を統一する。
- 3 英文の引用箇所における非標準英語表記やイタリック体表記など、全て原文どおりである。

References

Bell, Bernard W. “William Faulkner’s “Shining Star” : Lucas Beauchamp as a Marginal

- Man." *Critical Essays on William Faulkner : The McCaslin Family*. ed. Arthur F. Kinney. 1990 : 224-233.
- Clark, Keith. "Man on the Margin : Lucas Beauchamp and the Limitations of Space." *A Gathering of Evidence : Essays on William Faulkner's Intruder in the Dust*. eds. Michel Gresset and Patrick H. Samway. Fordham University Press, 2004 : 17-35.
- Cowley, Malcom. *The Faulkner-Cowley File : Letters and Memories, 1944-1962*. Viking Press, 1966.
- Dussere, Erik. "The Debts of History : Southern Honor, Affirmative Action, and Faulkner's *Intruder in the Dust*." *The Faulkner Journal*. Johns Hopkins University Press, 2001 : 37-57.
- Faulkner, William. *Faulkner in the University : Class Conferences at the University of Virginia 1957-1958*. eds. Frederick L. Gwynn and Joseph L. Blotner. The University of Virginia Press, 1959.
- . *Essays, Speeches, and Public Letters by William Faulkner*. ed. James B. Meriwether. Random House, 1965.
- . *The Sound and the Fury*. Random House, 1990.
- . "Go Down, Moses." *William Faulkner : Novels 1942-1954*. ed. Noel Polk. Literary Classics of the United States, 1994.
- . "Intruder in the Dust." *William Faulkner : Novels 1942-1954*. ed. Noel Polk. Literary Classics of the United States, 1994.
- Fujino, Koichi. "Two Visiting Men : Crossovers between Races, Classes and Genders in William Faulkner's *Intruder in the Dust* (KYUSHU STUDIES IN ENGLISH LITERATURE)." *Studies in English Literature : Regional Branches Combined Issue 6*, 2014 : 417-426.
- Hannon, Charles. "Race Fantasies : The Filming of *Intruder in the Dust*." *Faulkner in Cultural Context : Faulkner and Yoknapatawpha, 1995*. eds. Donald M. Kartiganer and Ann J. Abadie. The University Press of Mississippi, 1997 : 263-283.
- Jenkins, Lee. "Lucas McCaslin." *Critical Essays on William Faulkner : The McCaslin Family*. ed. Arthur F. Kinney, 1990 : 119-120.
- King, Richard H. "Lucas Beauchamp and William Faulkner : Blood Brothers." *Critical Es-*

- says on *William Faulkner : The McCaslin Family*. ed. Arthur F. Kinney, 1990 : 233-243.
- Kirk, Robert W. and Marvin Klotz. "The McCaslin-Edmonds-Beauchamp Family." *Critical Essays on William Faulkner : The McCaslin Family*. ed. Arthur F. Kinney, 1990 : 262-263.
- Morrison, Toni. *Playing in the Dark : Whiteness and the Literary Imagination*. Harvard University Press, 1992.
- Polk, Noel. "Man in the Middle : Faulkner and the Southern White Moderate." *A Gathering of Evidence : Essays on William Faulkner's Intruder in the Dust*. eds. Michel Gresset and Patrick H. Samway. Fordham University Press, 2004 : 167-188.
- Singal, Daniel J. *William Faulkner : The Making of a Modernist*. The University of North Carolina Press, 1997.
- Sugimori, Masami. "Signifying, Ordering, and Containing the Chaos : Whiteness, Ideology, and Language in *Intruder in the Dust*." *The Faulkner Journal*. ed. Jay Watson. Johns Hopkins University Press. Vol.22. Fall 2006/Spring 2007, fau.2006 : 54-73.
- Weinstein, Philip M. *What Else But Love? The Ordeal of Race in Faulkner and Morrison*. Columbia University Press, 1996.
- 平塚博子. 「戦争・国家・人種 : 「新」南部物語としての『墓地への侵入者』」 *SOUNDINGS*, 40号. サウンディングス英語英米文学会, 2014 : 93-104.
- 本多創造. 『アメリカ黒人の歴史』新版. 岩波書店, 2020.
- 本間武俊. 「『墓地への侵入者』について : フォークナーの世界への侵入」 *Kanazawa English Studies* 13巻. 金沢大学英文学会, 1971 : 23-34.
- 池内正直. 「南部の全体像—フォークナーの *Intruder in the Dust* について—」『明治大学教養論集』127巻. 1979 : 71-94.
- 萱場千秋. 「William Faulkner の *Go Down, Moses* における人種、性、補償」『立教大学ジェンダーフォーラム年報 : Gender-Forum』21号. 2019 : 51-61.
- 永尾 悟. 「『墓地への侵入者』における白人南部の心象地図」『文学部論叢』106号. 2015 : 119-129.
- 大橋健三郎. 『ウィリアム・フォークナー研究』〈全1巻・増補版〉. 南雲堂, 1996.
- 太田直子. 「*Go Down, Moses* 試論1 : Mollie を中心にして」『愛知淑徳大学論集』.

愛知淑徳大学文学部, 2002: 13-25.

相田洋明. 「『墓地への侵入者』のギャヴィンとチック」『英米言語文化研究』No.42.

大阪府立大学英米言語文化研究会, 1994: 65-71.

田中久男. 『ウィリアム・フォークナーの世界 自己増殖のタペストリー』. 南雲堂, 1997.

谷口義朗. 「フォークナーの『墓地への侵入者』」『英文学論集』36号. 関西大学英文学会, 1996: 47-59.

寺沢みづほ. 「Go Down, Moses 考—「姿を消したが消滅してはいない」過去との絆—」『学術研究：人文科学・社会科学編』64巻. 早稲田大学教育・総合科学学術院教育会, 2016: 193-216.

上杉 忍. 「肌の黒いわれわれもアメリカ人だ」『アメリカの歴史』. 有賀夏紀、油井大三郎編. 有斐閣, 2017: 119-140.

依藤道夫 and 齊藤 昇. 「アメリカ南部精神の研究：ウィリアム・フォークナー、O・ヘンリー、スティーヴン・フォスター、ジョン・P・スーザを通して」『都留文科大学大学院紀要』. 都留文科大学大学院, 2003: 51-79.

吉田迪子. 「ヨクナパトーフア郡の“VOICE”と“LEGENDS”」『英文学研究』47巻2号. 日本英文学会, 1971: 217-230.